

卒業論文

トルコ語とアラビア文字・ラテン文字

東京外国語大学 外国語学部

南・西アジア過程 トルコ語科

8501091 永井 捷子

指導教員 菅原 睦

はじめに

教育の基礎は読み書きの簡潔さである。そのためにはラテンアルファベットをもとにした新しいトルコアルファベットが必要である。誰もがそのような試みは困難であると考えている中、アタチュルクのリーダーシップのもと文字の改革を実行した。1928年それまで長い間使われていたアラビア文字がラテンアルファベットに置き換えられた。当初アタチュルクは、専門家に文字の変更を実施するにおいて、15年間という長期間、または5年間という短期間の二つの案がある。と伝えられた。するとアタチュルクは「では私達は3ヶ月でやり遂げる。」と言った¹。

1920年代が終わろうとするときには新しいトルコアルファベットが完全に導入され、8母音21子音合計29文字のトルコアルファベットは子供達にとっても容易に覚えられ、西洋の言語の習得にも役立った。また、1930年代から1970年代頃まで、イスラム教を国家の運営から切り離す世俗主義化政策の一環として言語純化運動が行われ、数千の単語がアラビア語やペルシャ語を起源とするものでしたが、それらをトルコ語に変えたり他の外国語を借用したりすることで新造語彙を導入しアラビア語やペルシャ語を排除するような改革も同時に行った²。トルコ語を独自のものとして確立したのである。

アタチュルクの言語改革はこうして大成功をおさめ、トルコの歴史上重大なる出来事のひとつとして考えられている。しかし、文字を改良しようとする動きは、西欧という巨大な存在に直面していた1839 - 1876年のオスマン帝国における西欧改革運動（タンジマート）の後すでに知識人たちによって言い争いが始まっていた³。この論争はラテン文字が普及した今現在も続いているのである。つまり改革は短期間で成功したものの、果たして人々が本当に必要とする文字はアラビア文字、それともラテン文字なのか。本稿では二種類の文字の役割や歴史を見ながら、改革前後の時期に知識人たちがこのテーマについていかなる意見を述べていたか、また同様に文字改革を試みた外国の例を取り上げて、様々な視点から文字改革の意義について探ることを目的とする。

言葉と文字の関係は、人と衣服の関係に似ている。私たちは自分に合う衣服を選び、それを身につける。しかし合わない時もあれば、流行を追うために気に入らなくなることもある。今日それぞれの言葉が特定の文字を使うことに決まった背景には、文化、宗

¹ SAMİ N.ÖZERDİM. “YAZI DEVRİMİNİ KAVRAYAMAYANLAR”, *TÜRK DİRİ*, Yıl28, Cilt XXXV I I I, Sayı 326, 1 Kasım 1978, pp.528~589.

² 林徹「トルコ語の文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄『言語学大辞典』三省堂、2001、pp.678~683。

³ Hüseyin Yorulmaz. *TAZİMATTAN CUMHURİYETE ALFABE TARTIŞMALAR* KİTABEVİ, İSTANBUL, 1995, p.7.

教、政治などの歴史的要因が働いています。使用する文字がいったん決まった後、その文字を言葉に合わせて手直しを繰り返すこともある。また完全に変えてしまうことも。まるで私たちが衣服をぴったり体に合わせるために、体つきに合わせて手直しするように。または新たに体つきに合った服を選び直すように。トルコ語は19世紀後半から衣服が体つきに合わないと思いはじめた。はたして自分の体にぴったりの服を見つけたのでしょうか。

第一章 トルコ語を表記する様々な文字

現在、世界にはラテン文字を代表とし、キリル文字、アラビア文字や漢字など多くの種類の文字がある。もちろん世界の文字がこれらの代表的な文字にたどり着くまでは長い文字体系の歴史があった⁴。言語や文字が歴史を持ち、変化や改良を繰り返すと同様に、国自身が使用している言語や文字が変更されることもある。今日のトルコではラテン文字を用いて言葉を表している。しかし、約80年前までトルコ語を表していた文字はアラビア文字であった。トルコ語の大きな転換期はこの1928年の文字改革であるといえよう。本章では、トルコ語の歴史、トルコ語を表記した二種類の文字の歴史、なぜアラビア文字を用い、ラテン文字を選んだか。言語と文字の関係とともに見ていきたい。

1 アラビア文字

アラビア文字はヘブライ文字と同じように、フェニキアのアルファベットから生まれた。ヘブライ語と同じく右から左へと書き、文字自体は母音表記しない。文字体系には18の記号があり、点と組み合わせることで29種類の文字を作ることができる。もともとアラビア語を書きあらわすために発展した文字である⁵。しかしイスラム教の成立とその後の急速なイスラム世界の拡大にともなって、西は北アフリカ、ヨーロッパのイベリア半島まで、東はペルシア、中央アジア、インド、東南アジアまで広大な地域に伝わった。その結果、この文字はイスラム教の広まった地域のさまざまな言語を表記するためにも使われた。もしキリスト教国がヨーロッパ南部でのイスラムとの対立に敗れていたら、現在のヨーロッパでもアラビア文字が使われていたのかもしれない。

一方トルコ語の文字の歴史⁶は、東アジアや中央アジアのチュルク系諸言語ではすでに八世紀から、突厥文字、ソグト文字、マニ文字、ブラーフミー文字、アラビア文字な

⁴ ジョルジュ・ジャン『文字の歴史』創元社、1990、p.134。

⁵ ジョルジュ・ジャン、前掲書、p.62。

⁶ 林徹「トルコ語の文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄、前掲書、pp.678~683。

どを用いて碑文や文献が残されているが、西アジアのアナトリアでは、11世紀にトルコ系のセルジューク朝が成立した後もトルコ語は話し言葉であり、書き言葉としてはもっぱらペルシア語が用いられていた。13世紀にようやく、アラビア文字を用いたトルコ語文献が現われ始める。この時期のアラビア文字トルコ語文献には、アラビア語・ペルシア語からの外来語彙が少ないこと、トルコ語固有の語彙における母音が文字ではなく母音記号により表記されたこと、などの特徴が見られる。オスマン朝がアナトリアとバルカンを支配下に収める15世紀以降は、アラビア語・ペルシア語からの外来語を大量に含むトルコ語がオスマン朝の書き言葉として定着し、多くの文献が残された。表記法の標準化も進み、オスマン朝にちなみ「オスマン語」と呼ばれるようになる。

オスマン語の主な特徴⁷⁾には、

1. 複数の音に対応する文字がある。たとえば、**ك** は k, g, n, v に対応する。
2. アラビア語・ペルシア語からの外来語では、トルコ語固有語彙に用いられた表記法に関係なく、ほぼ原語でのつづりが用いられる。
3. トルコ語固有語彙では短母音が **ا** (a, e), **ه** (e, a), **ي** (ı, i), **و** (o, ö, u, ü) を用いて示されたが、必ずしも全ての母音が表記されるわけではない。とくに、出現頻度の高い語では、まったく母音が表記されないこともある。
4. 接尾辞・付属語には、語幹の母音や末尾の子音に従った音韻交替が見られるが、オスマン語の表記にはこうした交替はあまり反映されず、むしろ1つの形態素に1つの表記が対応する傾向が見られる。

たとえば、奪核接尾辞は - dan / - den / - tan / - ten と交替するが、オスマン語

表記では常に **دن** と表記される。

以上のような特徴は、オスマン語に多くの同綴異義語を生じさせた。オスマン語を読み理解するためには、ある程度のアラビア語・ペルシア語の知識が不可欠であった。

よって国民の大多数はアラビア文字を難しく感じアラビア文字で表記されるトルコ語はトルコ語の構造に合っていないという声上がるようになった。アラビア文字はトルコ語の構造に合うものではない、正書法の欠陥の大きな原因である。アラビア文字にはトルコ語にない発音もあれば、またアラビア語には3つの母音しかなく、トルコ語には8つある。このため、アラビア文字で表記されるひとつの単語でいくつもの意味のトルコ語になってしまう。しかし文脈や母音調和などで単語の意味を見分けることは可能であった。ただ問題となったのは写本筆者や印刷業者は常に単語の区分に気をつけていなかったため、やはりオスマン語の文章は読むことが困難であった。

⁷⁾ 林徹「トルコ語の文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄、前掲書、pp.678~683。

2 ラテン文字

ラテン文字とラテン語はヨーロッパを中心に使われつづけている。15世紀に、ヨーロッパの国々は次々と他の大陸の進出に乗り出した。彼らは交易にも、植民地支配にも、自分たちの文字と言葉を使ったため、ラテン文字はヨーロッパを飛び出し、広い世界にどんどん広がっていったのである。この世界中で使われている文字は、数多くの言語の文字に影響を及ぼした⁸。

トルコは近代化のため、また言葉を正確的に書くため、1923年に国の体制が変わったのと同時に、音を正確に書き表すしくみを持ったラテン文字でトルコ語を書き表す計画が立てられた。1928年、ラテン文字によるトルコ語正書法が制定された。ラテン文字（ローマ字）で表記されるトルコ語⁹は、1つの文字がほぼ1つの音に対応する表音的な表記を基本とする。文字の数は、大文字・小文字をあわせて1文字と数えれば29である。一般的なラテン・アルファベットのうち、q、w、xの3文字はトルコ語では用いられない。また、付加記号をもたない字母ともつ字母（c/ç, s/ş, o/ö, u/ü, ı/i, g/ğ）は、それぞれ別の文字として扱われる。文字の一部と見なされない付加記号として^ˆがある。a, i, uの上に付加され（iの点は省かれる）、母音の長いこと、あるいは直前の子音の口蓋化を表わす。この付加記号は省略されることが多く、現在とくに新聞ではほとんど使われない。ラテン文字によるこの文字体系は、音素記号に極めて近く、発音と音素の対応も容易に想像できるものが多い。

3 その他の文字

トルコ語は、アラビア文字以外にギリシア文字とアルメニア文字によっても表記された¹⁰。

ギリシア文字によるトルコ語文献は主に18世紀初頭から1920年代まで600点近くが出版されている。最初は宗教書が多かったが、19世紀にはいと、西洋の文学の翻訳など、文学作品も含まれるようになった。ギリシア文字による表記は、アラビア文字を用いたオスマン語よりはるかに表音的で、当時のカラマンルの人々の発音をかなり忠実に表していると言われる。

アルメニア文字により書かれたトルコ語文献も、17世紀頃から見られる。19世紀には新聞や雑誌なども出版された。ひとつの例として、19世紀末から20世紀初頭にかけてのイスタンブールでは、コスモポリタンな演劇文化が花ひらいていた。当時の演劇

⁸ 町田和彦『ラテン文字と世界の言葉』小峰書店、2005、p.7。

⁹ 林徹「トルコ語の文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄 前掲書、pp.678~683。

¹⁰ 林徹「トルコ語の文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄 前掲書、pp.678~683。

ポスターおよびプログラムには、アラビア文字を用いたオスマン語のみならず、アルメニア文字、キリル文字、ヘブライ文字、さらにはフランス語が記されている。このことから当時の国民が用いていた文字あるいは言語の多様性がうかがえる。¹¹

ギリシア文字やアルメニア文字によるトルコ語表記は文字改革の動きに対し、ある程度の影響を与えたと考えられるが、トルコ語の表記法としては決して主流になることはなかった。

フランス語のスペルでのトルコ語表記¹²も試みられた。フランス語はヨーロッパ言語の中で最もトルコ人の中で知られていたため、ケマルも大使館付き陸軍武官だった時にトルコ語を音声学上にフランス語で表した文章を書いている。しかし、フランス語スペルはアラビア文字よりも多くの文字でひとつの単語を表し、より場所をとっていた。フランス語スペルは都合のいいものではなかったが、これは確実にラテン文字によるトルコ語表記の可能性を示すものとなった。

ここに第一次世界大戦直前、アタチュルクが陸軍士官としてソフィアに駐在していたときに、イスタンブールにいた友人にあてた手紙の一部がある。この手紙は音声学上、フランス語のスペルで書かれている。その下には現在のトルコ語のスペルがあり、ぜひ比較していただきたい。

Dunya inssanlar idjin bir dari imtihandır. İmtihan idilene inssanın here cuale moutlaka peke mouvafike djevabe vermessi mumqune olmaya bilire. Fekate duchunmelidir qui heuquume djevabların heieti oumoumiyessindene hassil olan mouhassalaya gueure virilir.

Dünya insanlar için bir dar-ı imtihandır. İmtihan edilen insanın her suale mutlaka pek muvafık cevap vermesi mümkün olmayabilir. Fakat düşünmelidirki, hüküm, cevapların heyet-i umumiyesinden hasıl olan muhassalaya göre verilir.

人類にとって、世界は試験会場である。受験者が全ての問題に適切な解答を与えることは必ずしも可能ではない。しかし、このように考えなくてはならない。判断は全ての答えから得る結果の一致によって与えられる

もうひとつの例を挙げてみよう。これはトルコの国歌最初の一部が、1. 新しい（現

¹¹ 付表 1 を参照。アジア・アフリカ言語文化研究所ホームページより。

¹² Geoffrey Lewis, *The Turkish Language Reform A Catastrophic Success*, OXFORD University Press, 1999, p.31.

在の) トルコ語¹³、2. アラビア文字¹⁴、3、フランス語つづりでそれぞれ表記されている。

1. Korkma, sönmez bu şafaklarda yüzen al sancak,
Sönmeden yurdumun üstünde tüten en son ocak.
O benim milletimin yıldızıdır, parlayacak;
O benimdir, o benim milletimindir ancak!

Çatma, kurban olayım, çehreni ey nazlı hilâl!
Kahraman ırkıma bir gül; ne bu şiddet bu celâl?
Sana olmaz dökülen kanlarımız sonra helâl.
Hakkıdır hakka tapan milletimin istiklâl...

¹³ Etem ÜNGÖR, *TÜRK MARŞLARI*, ANKARA, 1966, p.164.

¹⁴ BİLAL N ŞİMSİR, *Türk Yazı Devrimi*, Türk Tarih Kurumu, 1992, p.371.

このように同じ音で読まれる文章でも、文字が占めるスペースは異なる。ラテン文字のフランス語つづりの文章はアラビア文字表記の文章よりも文字数が多い。この違いは、次の章の文字の変更における論争の中でもよくあげられる問題であった。

第二章 文字の改良 (İslâh-ı hurûf) から文字の変更 (tebdîl-i hurûf) へ

1839 - 1876年のオスマン帝国における西欧改革運動（タンジマート）の後、知識人たちによってなぜ国が遅れているのかについて、当時ようやく新しく普及を獲得した新聞や雑誌において論争が始まったのである。この論争の主なテーマは、政治、経済、社会の問題でもって形成されていた。またこれらと平行して初めて言語や文字の問題も国の進歩の遅れの原因であるという意見が述べられた。1860年初頭に論争され始めたトルコ語の文字とスペルの問題は、ラテン文字が受け入れられた1928年まで勢いを増しながら続いた。その時代を代表する作家、芸術家や大学の教授がこのテーマを詳しく取り上げていた。初めは、トルコ語のシンプルで単純なこと、読み書きができる人々の割合を高め文盲になることから救い出すために「文字の改良」を提案し、のちにこの運動は「文字の変更」にたどり着いたのである。

もっと以前にも文字の表現はしばしば話題にされていたが、1920年代に盛んに議論された「文字の変更」のテーマは国の全ての読み書きが出来る人を巻き込んだ。この状態の中で、全ての人々は賛成または反対というどちらか片側に立場を置くことを求められた。

15

何百年もの間、使用してきた文字を捨て、代わりにラテン文字を取り入れる（「文字の変更」賛成派）主な理由は何なのかというと、意見は様々であった。

1. アラビア文字はトルコ語の構造に合うものではない、正書法の欠陥の大きな原因である。
2. 国民の大多数はアラビア文字を難しく感じ、ラテン文字のほうが読み書きしやすい。
なぜならばラテン文字は多くの母音を表すことが可能で、大文字と小文字の区別が出来る。
3. トルコが西洋文明の社会の一員になるためには大きく異なるアラビア文字ではなく、ヨーロッパの文字であるラテン文字を採用すべきだ。
4. アラビア文字はムスリムの進歩の遅れの原因で、ガブリエル¹⁶はこの文字をわれわれに

¹⁵ Hüseyin Yorulmaz. 前掲書, pp.8~23.

¹⁶ ガブリエルとは、四大天使の一人。アラビア語ではジブリールという。預言者ムハンマドに神の言葉コーランを伝えたのもこの天使である。コーランでは3度名前が言及されて

持ってきたのではない。宗教と民族性にはなんら関係はない。よってイスラム教徒であるトルコ人がこの文字に縛り付けられる必要はないという。

一方「文字の変更」反対派の主な意見はというと、

1. アラビア文字の正書法の欠陥は一時的なもので、改善は可能である。今の文字に一つ二つマークをつければ、また必要のない文字を除けばスペルの問題は解決できる。
2. 西洋文明の集団に入ることについては、ヨーロッパの文字の形を採用することは必なく、ヨーロッパ文明に入っている日本だってまだ昔の文字を守り使い続けている。ラテン文字と改革とのつながりは成り立たない。
3. 国民の知識の低さは経済の発展が遅れていることと、教育の不十分のせいである。国家の遅れの理由が、使用している文字が難しいか簡単かには関連性はない。
4. アラビア文字は素晴らしいものだ、短い時間で読めて目を疲れさせない。右側から左側に書くからすばやく書くことも出来る。ラテン文字を採用する前に現存の文字のよい改良方法を考えるべきだ。
5. アラビア文字はコーランの文字¹⁷であり、ムスリムのシンボルである。文字を変えることはトルコとイスラム世界とのつながりを切ることを意味するのだ。

このようにバラバラに分かれた意見は、文字のみに着目したものもあれば、宗教的なものもある。最も強い意見はやはりイスラムに属すべきか、ヨーロッパに属すべきかであった。

本章は、当時この研究を取り上げた作家、芸術家、学者の見解を個別に取り上げながら、賛成派と反対派のどちらか一方に立場をおいた理由を探った。

1 1860年～

タンジマートの後、現存する文字を新しく整えることについて、アフメット・ジェヴデット・パシャは初めて見解を主張した。もちろんパシャはこれに関してもっと以前から意見を述べていた。ジェヴデット・パシャは *Kavaid-i Osmaniye* という名の作品で、トル

おり、26章193節の「信頼すべき霊」もガブリエルを指す。(日本イスラム協会、島田襄平、板垣雄三、佐藤次高(監修)『新イスラム辞典』、平凡社、2002、p.184。)

¹⁷ 『コーラン』では、文字は「神の文字」を意味した。たとえ読めなくても、理解できなくても、人はそれを尊いものとして崇める。アラビア語以外の言葉を話すアジアやアフリカでも、『コーラン』だけはいまだにアラビア語で教えられている。アラビア文字が非常に装飾的な造形をもつことになったのもこれにつながる。(ジョルジュ・ジャン、前掲書、pp.61-62)

コ語にあるアラビア文字で示せない音を表現するために解決法を見つけ出す必要があると書いた。この何年か後に同じテーマでミュニフ・パシヤが意見を述べた。ミュニフ・パシヤは雑誌の記事でアルファベット (elifba) の進化のため、文字の記号と別々に離して書かれることを勧めた。なぜならば、ヨーロッパでは6、7歳の子供たちはすでに上手に読み書きをしているのに対して、トルコはというと文字の難しさが原因でその年になっても文字を身につけられないという。

同じ時期にもう一つの討論が Terakki 紙で起きた。この新聞の中で “Maarf-i Umumiye” (国民教育) という題名でハイレッディン・ベイの署名の記事が発行された。この記事の主な目的は文字の変更についてであった。このように述べている。

現存の文字はコーランの文字で、トルコ人の民族のシンボルである。この文字を変更しないことはオスマン人の前進を不可能にする証明になり、我々 (オスマン人) が進歩しないことはヨーロッパの国々から遅れることにつながるのである。また文字は学問の門となる存在で、この門を重くすべきでない。

Terakki, 31 Temmuz 1869.

しかし、何日後かハイレッディン・ベイのこの記事に対して、同じ新聞でエブズズィヤ・テヴフィッキ・ベイが厳しい答えを出した。テヴフィッキ・ベイは反論を三日続けて新聞に載せた。

文字は学問の門ではない、知識の門の鍵の役割を果たしている。今までの我々は鍵の使用場所を間違え、間違った門を開けていた。イギリス、フランスやアメリカの国民はトルコ語よりもっと難しい言語を使用し、読み書きをしている。トルコ言語の難しさは文字の責任ではない、初等教育で採用されている方法に問題があるのだ。

Terakki, 2-3-4 Ağustos 1869.

国や民族の詩をうたっているナームク・ケマルもこのテーマについて意見を述べていた。エルネスト・レナンが言った “アラビア文字はイスラムの進歩の妨げ” に対して反論を書いた。またイラン大使メルコン・ハーンの主張 “イスラム諸民族はアラビア文字のせいで衰退に見舞われている” に対しても書いた。ナームク・ケマルは次のように述べた。

トルコ語のために他の文字を採用するという無駄な仕事をするな。オスマン学者協会はアフンザーデによる試みを認めたにもかかわらず、それを学校教育で採用しなかった。協会のメンバーの一人すらこの試みを学ぼうとしなかった。

Hürriyet, 23 Ağustos 1864.

彼は言語（アラビア文字表記）の改良が広く普及することを信じた。また他の記事においても意見を述べた。

国の遅れは言語の責任ではない、トルコ語と同じくらい難しい読み書きをする英語をアメリカ国民のほとんどが使いこなしている、我々はこの現実に影響を受けるべきで、教育の方法を改めて考え直すべきだ。

Tasvîr-i Efkâr, 10 Temmuz 1866.

一方、タンジマート後期に活動した啓蒙家のアリー・スアーヴィは「文字の改良」問題を宗教と混入すべきでない以下のように主張した。

アラビア文字は記録の必要性の問題だ、「文字の変更」はいらない。アラビア文字でトルコ語を表すことは、ラテン文字で表すヨーロッパの文字と比べたら、より速く書いて座っても立っても書ける。またより少ない場所を占める。アラビア文字にはメリットがある。

スアーヴィはアラビア文字を守り続けることを強調し、ムスリムとの一体性を保つ重要性があると述べた。しかし彼の主張は文字の変更に反対したものの、文字の改良の必要性がないという意味を含んでいなかった。

文字の改良の論争が集中して話題になっていた1860年代以降の40～50年の間にも同じ話題がしばしば取り上げられていた。この時期は文字を新しく調整することが論文のテーマになったけれど、言語の単純化の問題にとどまった。

2 1900年～

1923年3月2日のイズミルで行われた経済会議で、軍人のキャズム・カラベキルは、スピーチにおいてたびたび新聞などで触れられていた文字の改良問題に対して答えを述べた。

我々は文字を読めないのではない、アラビア文字は世界で最も美しい形をした文字である。それに、私は第一次世界大戦で外国人と共に二年間働いたことがある。私は彼らより倍の速さでメモをとり、仕事を終えた。ドイツ語やフランス語にはトルコ語を表現できるようなラテン文字はない。

この何ヶ月か後、ヒュセイン・ジャーヒットは新聞記事で、我々をオスマン人が使っている文字と結びつける必要性はまったくないと言った後に、このように述べた。

子供たちは学校で三年、四年、勉強しているのにまったく読み書きを学んでいない。このような言語、教育はありなのか？村の子供が何年も学校に行って、何も学んでこないのなら何のために時間を費やすのか。なぜ畑で働かないのか。学校へ行き、学び、そして何も得ない。新聞は読めない、本も読めない、出版はなくなるのだ。

Resimi Gazete, 22 Eylül 1923.

ジェナブ・シェハベッティンは言語の問題を取り上げたある記事において、トルコ語はスペルが全ての難しさの根本的な理由であると述べ、問題を最初にアラビア文字を用いてトルコ語を書く間違いを選んだ祖先に結び付けた。

トルコ語には音声上の要求を実現するのに適合する特別な文字が必要だ。
今日我々はこの必要性から強く苦しみ、この苦しみに動かされて文字の
1 0 0 0通りもの改良が提案されている。

Servet-i Fünûn, 27 Ağustos 1925.

1926年3月28日付けのAkşam紙は、当時を代表する作家や大学教授たちの間で“ラテン文字を受け入れるか、受け入れないか”についての調査を始めた。

受け入れるべきと答えた者はたったの三人であった。それは、アブドゥッラ・ジェヴデト、レフェト・アヴニとムスタファ・ハーミットでした。

一方受け入れないと主張した者は、アガー・スル・レヴェンド、アリー・ジャニップ、アリー・エクレム、ムアーリム・ジェヴデト、イブラヒム・アラエッティン、ネジブ・アスム、代表的立場にいたアヴラム・ガランティ、ヒュセイン・スアト、ハリル・ニメトゥラ、ヴェレト・チェレビ、イブラヒム・ネジミ、ハリト・ズィヤ、Z o l t a n G o m b o c z とムスタファ・シェキプであった。¹⁸

参加した半数は当時使われていた文字（アラビア文字）に賛成する見方を発表し、政治権力に対し彼らの意見の重さを示した。このことは文字改革が何年か遅れてしまったことをもたらした。

ムアーリム・ジェヴデットは、我が国が遅れている理由をアラビア文字のせいだとしている人々に対して、次のように述べた。

私はスペインのようなラテン文字を使用している国はなぜ遅れているか。

¹⁸ SAMİ N.ÖZERDİM. “YAZI DEVRİMİNİ KAVRAYAMAYANLAR”, 前掲書, pp.528～589.

イタリアでもなぜたくさんの無知な人がいるかを考えてみた。逆にラテン文字ではない最悪な文字を使っている日本は成長している。シンプルにされた言葉や言葉に関して書かれた何千もの作品は、進歩の遅れの理由にならないのである。

Akşam, 31 Mart 1926.

小説家のハリド・ズィヤは、ラテン文字の受け入れに賛成すると言い、アリ・エクレムと同じくアラビア文字が速く書かれる良さを述べた。

私が言うのは言語の学問的な完全さを考慮したうえで現存の文字（アラビア文字）に細かい改良を加えて、そして維持することは言語のための利益はある。

Akşam, 24 Nisan 1926.

イブラヒム・ネジミは、オスマン文字は外国人にとって難しいと主張する人々へこのような答えを与えた。

外国人が学びやすくなるといって1つの言語の文字を変えてしまうことは今までにまったく聞いたことがない。今日外国人の一番多く学んでいる言語は、つづりが最も簡単な言語ではない。みんな英語やフランス語を勉強している。だれもポルトガル語を学んでいない。国際的経済関係の結びつきで我々の言語を学ぶ必要性を見出したならば、外国人は難しい書き方をしていてもトルコ語を学ぶだろう。世界大戦でドイツ人の教授たちはトルコ語を学んだ、文字に対して大きな不満を抱いた人を聞いていない。

Akşam, 19 Nisan 1926.

大学教授の中からハリール・ニメトゥラフは、ラテン文字の受け入れは“社会的なあやまち”になると述べた。ハンガリー科学学校のメンバーでトルコ語に関しての研究で知られている東洋学者 **Gombotes Zoltan** もアンケートに送った答えにおいて、言語のいくつかの調整で問題は解決されるだろう、このかたちで祖先が残してくれた作品を利用できるだろうと述べ、次のように続けた。

ラテン文字を受け入れる前に、1つの言語にはよく知られている方言があることが必要である。ドイツ人やフランス人やその他の民族がそうであったみた

いに、たくさんの個別の方言の中から共通となるひとつの一般的な方言を見つけるべきである。

Akşam, 8 Nisan 1926.

さらに、当時のトルコ語にはまだそのような方言がなかったのに対してこう述べた。

まず初めにひとつの共通した形で話される言語を作るべきである。そのような言語を持たずして新たな文字を受け入れることはどれほどおかしな事か。アナトリアの人々の間では様々な方言が話されている、よって新しい文字はどの方言をもとにして書くつもりなのか。

Akşam, 5 Mayıs 1926.

ラテン文字をトルコ語に導入することは不可能であると主張したトルコの歴史家ゼキ・ヴェリディ・トーガンは不安を抱えながら意見を述べた。

文字の変更を実行するのは、強制という方法で一気に行うか、ゆっくりと教育という方法で行うかだ。強制の場合は、たとえばアラビア文字の使用を完全に禁止し、人々が理解しようかしまいかラテン文字を使う。文字の問題がラテン文字の受け入れでもって解決されるのならば、この方法は国の中で4,5ヶ月も続かないだろう。なぜなら政府の命令のほとんどが国民に何かを与えるのではなく、国民から何かを取り上げるために書かれている。文字が読めないことは、そのうち国の働きが麻痺していくことを意味するのだ。

Türk Yurdu, Aralık 1926.

ジェラルール・ヌーリはかつて、トルコがラテン文字を受け入れることに賛成し、“トルコ人の1千年も続いた歴史には何もない”と言う表現を用いこのように続けた。¹⁹

我々の図書館は古くて空っぽだ。500冊のうち、今日の文化的な重用性に応じるのに十分なものは1冊あるかないかだ。この数少ない重要書物をゆっくりとラテン文字で印刷することは非常に簡単である。我々の図書館がフランスやイギリスの図書館みたいに莫大な宝を持っているのならば、文字を変更するのは大変だと言えよう。しかし、我々には何がある、古くて、間違った使い物にならない本ばかりだ。これらをわざわざラテン文字に書き換えるのならば、捨ててしまうほうがいい。

¹⁹ SAMİ N.ÖZERDİM. “YAZI DEVRİMİNİ KAVRAYAMAYANLAR”, 前掲書, pp.528～589.

1860年から1928年まで、そしてその後も、文字の改革に関係した本や雑誌が多く発行され、新聞においても論争が激しくされていた。しかし、この事実を忘れてはならない。1926年までにアラビア文字を守る人々、またはラテン文字の受け入れを反対する立場にいた人々は、1928年から始まったトルコ文字の採用ではラテン文字の支持者に立場を移した²⁰。

イブラヒム・ネジミは文字が変更された時期、先頭に立って改革に加わった。イブラヒム・アラエッティンも教育者として当時やるべきことを実行した。M. シェキップ・トゥンチはというと、1928年8月2日に大学で新しい文字についての最初のスピーチを行った。アリ・セイディはラテン文字受け入れの反対者として多くの文章を書いたが、1929年に出版されたラテン文字を用いた最初のトルコ語辞書の著者となった。これは本人にとっても大きな驚きであったでしょう。

第三章トルコ語と新しいアルファベット

教育の普及、経済の発展のためにトルコで19世紀前半に西洋化改革が行われると、オスマン語の表記や、アラビア文字そのものを改革しようとする動きが見られるようになった。前章で1926年を中心にアラビア文字支持者たちの声が続々とあがっていた一方では、外国の文化にふれ、近代への転換を望んだ人々は、多くの反対を押し切って、長い歴史を持った国の文字を改革することを試みた。そしてアタチュルクは文字の変更を実現させ、1928年、ラテン文字によるトルコ語正書法が制定されました。

1 文字の改良・変更挑んだ人々

1851年から、アフメット・ジェブデット・パシャが文字の問題に着目し出し、文字を新しく整えることに関しての動きが始まった。そしてミュニフ・パシャが二つの解決策を見つけ出した²¹。一つ目の方法は、文字は完全に記号をつけて書かれ、印刷されること。アラビア文字にある3つの記号と、新しく考え出されるトルコ語に合った5つの記号を用いて。二つ目の方法は、アラビア文字を分離させて個々に書くことであった²²。

こうした中でまず試みされたのは、アラビア・ペルシャ語からの外来語彙の表記そのままに、一部のトルコ語固有語彙において習慣化していた母音非表示を改め、出来る限り多

²⁰ SAMİ N.ÖZERDİM. “YAZI DEVRİMİNİ KAVRAYAMAYANLAR”, 前掲書, pp.528~589.

²¹ 林徹「トルコ語の文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄、前掲書、pp.678~683。

²² 付表2を参照

くの母音を表記しようとする表記法上での改革だった。しかし、20世紀にはいると、アラビア文字自体が改革の対象となり始める。たとえば、アラビア文字の独立形を基に、前後の文字とは関係なく常に1つの字形を持つ *Huruf-u munfasila* が提案され、当時の国防大臣エンベル・パシャにより軍でも試用された。

結局、実用には至らなかったものの、新アルファベットによる表記には重要な改良点があった。依然としてトルコ語の語彙のかかなりの部分を占めていたアラビア語・ペルシア語からの外来語彙の表記に実際の発音を反映させたこと、およびトルコ語で区別されるか各音（特に母音）に別々の文字を割り当てたことである。外来語彙にのみ使われる文字が残されていた点など、アラビア語やペルシア語の綴りを部分的に引きずっていたが、アラビア語・ペルシア語の知識がなければ使いこなすことが出来なかったオスマン語に比べれば、大きな変化があった。

一方では、アゼルバイジャン人で作家のミルザ・フェサーリ・アフンザーデによってアラビア文字の関しての試みが行われた²³。ミュニフ・パシャと同じ見解を持つアフンザーデは、ティフリスを離れイスタンブルにやってきて、自分の作品と一緒に「文字の改良」について自ら準備した案を大宰相のサドラザーム・ケチュジザーデ・ファド・パシャにささげた。ファド・パシャはこの案を検討のために *Cemiyet-i Ilmiyet-i Osmaniye*（オスマン科学協会）²⁴に送った。アフンザーデの見解は取り上げられ、その利点も証明され認められたけれど、実行の移されることはなかった。なぜならばそれは大きな問題を引き起こし、昔のイスラムの作品が忘れられることを生みかねないということで受け入れられなかったのだ。

これと同時に、ラテン文字の採用についての論争も長い間にわたっておきていた。辞書編集者のシェムセッディン・サーミイは弟のアブデュル・ベイと一緒に、彼らの母語であるアルバニア語のために36個のラテン文字とギリシャ文字で構成されたアルファベットを考案した²⁵。1910年1月29日、新聞編集者のヒュセイン・ジャヒットが“アルバニア文字”という題目の記事を書いた。彼は彼らの進取的精神をたたえ、トルコもこれについていくべきだとコメントした。

2 アタチュルクと文字改革

²³ Geoffrey Lewis, 前掲書, p.28

²⁴ 1862年に設立される。

²⁵ 林徹「トルコ語の文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄、前掲書、pp.678~683。

オスマン帝国が崩壊し、1923年にトルコ共和国が成立すると、初代大統領ムスタファ・ケマル・アタチュルクは、イスラム教を国家の運営から切り離す世俗化政策を始める。その中で、イスラム教を密接な関係にあるアラビア文字に代わり、ラテン文字表記をトルコ語に導入することを検討し、政府に新たに設けた言語委員会に命じた。

1928年3月20日、大国民議会にて国際数字を受け入れることが票決された²⁶。討議の時、あるメンバーが国際文字をも受け入れたらどうかと発言した。教育大臣は、政府はこの問題に注目している、そしてこれは文明社会に入る原理に従って自然に解決されるであろうと回答した。しかし、三日後にそれは実行した。ラテン文字の利用における方法と実用可能性を考えるために9人のメンバーが集められた。彼らの最初の行動は1928年6月26日の会合で9人を二つのグループに分けた。一方はアルファベット、もう一方は文法を担当した。アタチュルクは彼らの会合に出来るだけ参加をしていた。

グループのメンバーであるファーリヒ・ルフクはアタチュルクに文字の変更を実施するにおいて、二つの案があることを伝えた。一つは15年間という長期間、もう一つは5年間という短期間。提案者たちによると、両方の期間において最初にすべきことは、文字表記をアラビア文字とラテン文字の両方から学ばなくてはならない。新聞ではコラムの半分を昔の文字(アラビア文字)、半分を新しい文字(ラテン文字)で書かれることから始まり、そして次第に新しい文字の部分を増やしていく。しかしアタチュルクはこう話した。²⁷

失敗で終わろうと、成功で終わろうとこれは三ヶ月でやり遂げる。新聞は全て新しい文字で書かれること。古い文字が存在する限り、人々はそればかりを読み、新しい文字に眼を向けないだろう。時間をかけて慣れさせることはできない。もしその間に何か起きてしまったらどうする。戦争や国内の批判。我々の新しい文字はエンベルの文字のように消えてしまうだろう。短期間でやってしまおう。

トルコ語のための新しいアルファベットが満足のいくものになり始めると、アタチュルクはこれを大衆に紹介し、また広めるために、1928年8月9日ギュルハーネパークで行われた共和主義者の催し物に出席した。二日後に授業はドルマバフチェ宮殿で始まった。まず初めは大統領のスタッフや補佐官に、そして大学の教授や文学者に教えられた。文字の授業は次第に熱い討論に変わり、最終的に満場一致で採決された。

²⁶ Geoffrey Lewis, 前掲書, p.32

²⁷ SAMİ N.ÖZERDİM. “YAZI DEVRİMİNİ KAVRAYAMAYANLAR”, 前掲書, pp.528~589.

1928年10月8日から25日にかけて、全ての役人は新しい文字の適正試験が行われ、1928年11月1日の大国民議会で第1353条の法律として“新しいトルコ文字の採用と使用”が認められた。これは二日後に発行され、新しい文字はすぐに受け入れられ、使用に移されることを規定とした。古い文字で印刷された教科書の使用は禁じられ、その年の終わりには古い文字の本の出版はなくなった。1つだけの小さな譲歩が、以前のアラビア文字は速記で書かれる公式文書や個人の書類のみで1930年6月1日まで使用可能とした。²⁸

3 改革後のトルコ語

アタチュルクが1932年に言語を純化させる目的でトルコ言語研究委員会を作ったことは、言語改革の過程における第二段階となった。この機関は、設立後トルコ言語協会と改名され、1930年代から1970年代頃まで、世俗主義化政策の一環として言語純化運動を行った。アラビア語・ペルシア語起源の外来語彙と置き換えるための新造語彙が導入された²⁹。トルコ言語協会によって多くの新造語が、地域方言や古代チュルク語の派生接尾辞などを用いて作られた。定着率は必ずしも高くはなかったが、それでも同じ意味を持つアラビア語系外来語と新造語のペアが多く出現した。

1970年代以降、世俗主義に反対するより宗教的・保守的立場の人々はアラビア語系外来語彙を、世俗主義を支持するリベラルな人々は新造語彙を使う傾向が顕著となり、使用語彙に話し手の政治的立場が反映するという状況を生み出している。

一方では、ラテン文字アルファベットの導入以来、トルコ語ではどのような外来語もトルコ語での発音に従って表記されてきた。これは近代以降大量に借用されたフランス語からの外来語彙についても当てはまる。しかし、近年、英語からの外来語彙が増えるにつれ、これらの外来語彙が、原語での綴りのまま表記されることがしばしば見られるようになりつつある。英語からの外来語彙が、かつてのアラビア語・ペルシア語からの外来語彙のように、原語での綴りを保持しつつ定着するかどうかは、今後のトルコ表記に影響を及ぼす可能性がある。³⁰

一方、現在トルコの高校などでアラビア語やペルシア語を教えている。アラビア文字に興味を持つ若者も少なくない³¹。トルコの人々がアラビア文字の知識を身につけ、昔の文化

²⁸ Geoffrey Lewis, 前掲書, p.37

²⁹ 林徹「トルコ語」東京外国語大学語学研究所[編]『世界の言語ガイドブック2（アジア・アフリカ地域）』、三省堂、1998、pp.185~203。

³⁰ 林徹「トルコ語の文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄、前掲書、pp.678~683。

³¹ SAMİ N.ÖZERDİM. “YAZI DEVRİMİNİ KAVRAYAMAYANLAR”, 前掲書, pp.528~589.

産物にふれることは大変重要である。トルコは有名なアラビア書道家を多く輩出し、イスラム教国家として、アラビア文字を用いた貴重な文化遺産を多くもつ。若い世代が過去を振り返り、学ぶことを政府は支持し推進すべきである。

第四章その他の様々な文字改革

世界中には他にもかつて使用していた文字を変更し、または変更を試みた国が多く存在する。本章ではその代表的な国をいくつか取り上げ、それらの国が文字を変更しようとした、または試みた理由。あるものはキリスト教布教のため、植民地支配で他の言語の強い影響力のもとで、またあるものはトルコのように近代化の課程で自発的に取り入れる。しかし、一方では中国や日本はアラビア文字以上に歴史の長さや難易度をもった漢字を使用し、結果的にローマ字を補助的な文字として取り入れたものの、漢字を完全に廃止しなかった。これらの国がどのような過程を経て文字を変更しようとしたか、トルコの文字改革とどのような違いがあるかを見ていくことを目的とする。

1 ラテン文字を導入した国

ベトナム語³²

ベトナム語を書き表すのに最初に用いられた文字は、漢字を改造したチュー・ノムであった。しかしチュー・ノムは習得が難しく、一般の人々はこれを読み書き出来なかった。そんな中、ベトナムを訪れた西洋人宣教師たちは慣れ親しんだラテン文字でベトナム語を書き表そうとした。1651年にフランスのイエズス会宣教師ローズ（1591－1660）が著したベトナム語―ポルトガル語―ラテン語辞典は、彼が考案したラテン文字による表記法の集大成でもあった。

当初、ラテン文字の使用はキリスト教関連に限られていたが、19世紀後半にベトナムがフランス領になってから徐々に人々の間に広まっていった。1865年にはラテン文字

³² 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『アジア文字入門』、河出書房新社、2004、p.102。

で書かれた最初のベトナム語雑誌が発行され、1906年には植民地政府の教育改善委員会が副次科目としてラテン文字表記法を学ぶよう指導しました。1920年になると、ベトナム人作家の手になる小説がラテン文字で書かれるようになった。

1945年にフランスから独立したベトナム民主共和国のホー・チ・ミン大統領は、識字率向上のためにラテン文字の使用を推し進めることを宣言した。こうして宣教師の工夫からはじまったラテン文字表記法は、国が公式に認めたチュー・クォック・ングー（国語の字）と呼ばれる正書法になった。ベトナムはトルコ同様、習得の難しい文字を捨て、ラテン文字の仲間入りをした。

マレーシア語³³

14世紀ごろ、イスラム教とともにアラビア文字が伝わると、マレーシアの人々はアラビア文字に工夫を加え、自分たちの文字を書き表すのに使うようになった。その後、16世紀になるとポルトガル、イギリス、オランダがつぎつぎにマレーシアにやってきて植民地にしました。そしてヨーロッパの人々はラテン文字を使っていたため、マレーシアの人々も次第にラテン文字を使うようになったのである。1904年には、英語正書法の影響を受けたマレー語の正書法が作られました。

アゼルバイジャン語³⁴

8世紀ごろからアラブ人の支配を受けていたアゼルバイジャンでは、アラブ人の文字、アラビア文字が使われていた。

1922年にソヴィエト連邦（ソ連）に加盟したアゼルバイジャンでは、ロシアで起こった社会主義革命のあとに高まった文字改革の影響を受けて、文字を変えようとする運動が起こった。そして1929年、アゼルバイジャン語に工夫を加えたラテン文字で書き表すことになった。

ところが、その後1939年には、すでにソ連のほとんどで使われていたキリール文字を使う計画がたてられ、1940年にキリール文字を使用することが決定された。

しかし1991年、ソ連から独立すると今度はもう一度ラテン文字を使うことになりました。現在、公の文書はすべてラテン文字で書かれているが、新聞などもキリール文字のものとラテン文字のものの両方がある状況である。

2 ラテン文字を導入しなかった国

日本語³⁵

³³ 町田和彦 前掲書、p.13。

³⁴ 町田和彦 前掲書、p.13

³⁵ 町田和彦 前掲書、p.14

1549年、フランシスコ・ザビエルが日本にやってきて、初めてキリスト教を伝えた。その後も宣教師はつぎつぎと来日し、彼らは日本語を勉強したり布教したりするために自分たちが使っているラテン文字で日本語を書くようになった。『天草版平家物語』など、このころにラテン文字で書かれた書物も残っている。

日本は1635年から鎖国令を出し、外国との関係を制限するようになったのでその間はヨーロッパでただひとつ交流を続けていた国オランダからヨーロッパの文化や学問を取り入れていた。蘭学（オランダから伝えられるヨーロッパの学問）の学者たちの中には、ラテン文字で日本語を書き表すようにすればいいと考える人まで現われた。そして日本語をラテン文字で書こうとする動きが起こりました。この動きは明治時代になってさらに活発になり、1907年には小学校でラテン文字を教えることが決定された。その後1937年には、政府がラテン文字のつづり方を決めて発表した。第二次世界大戦後の1946年には、アメリカの教育使節団が来日。日本に対してラテン文字を教えるようにすすめた。これを受けて日本政府は、1947年学校でラテン文字での日本語の読み書きを教えることを決めた。

こうして、日本では学校でラテン文字が教えられるようになり、ラテン文字は少しずつ広がっていったが、漢字、ひらがな、カタカナという長い歴史を持った文字がしっかりと定着している日本ではラテン文字だけを使って日本語を書き表すことにはならなかった。

日本の場合はこれまでの例と少し異なる。いわゆる多言語国家ならぬ多文字国家と言える。上手に過去のもので残しながら、新しいものも取り入れている。現在の日本の街角の広告、商品には漢字やかな文字で書かれているものもあればラテン文字で書かれるものもある。見た目やデザインのためには様々な文字を駆使できる、そんな融通のきく日本の政策も面白い。

中国語³⁶

中国語の漢字の改革がたどった道はトルコの改革と重なる部分がある。ただ最終的に中国はラテン文字を受け入れずに昔から使用してきた文字（漢字）を改良することにした。もちろんこの結果にたどり着くまではトルコと同様に、多くの知識人たちが論争を繰り返した。文字の変更を唱える者もいれば、新たな文字を発案する者もいた。もちろん反対する者も。そして政治的圧力はどれほど影響していたか。これから様々な視点から中国漢字の改革を見ながら、トルコ語の文字改革と比較していこう。

漢字はBC2000年頃に生まれ、1500年頃に記号としての体裁を整え、BC202年からAD220年まで続いた漢王朝において文字としての体系が定まった。漢字という名はこの王朝のなから来ているといわれる。漢字は中国で生まれ、中国自身がもつ文字である。しかしそこには宗教とのつながりはない。この点はトルコと異なっている。

³⁶ 大島正二『漢字と中国人』、岩波新書、2003、pp.192~227。

漢字は中国文化の頂点として安泰な地位を保ちつづけた。しかし、繁栄を誇った清朝の滅亡（1912年）を目前にひかえた頃から、その運命も危機にさらされるようになった。外国の文化にふれ、近代への転換を自覚した人たちによって、漢字の改革論が唱えられるようになったのである。

中国の近代文学の元祖、国民精神の改造を課題とした作家、魯迅（1881～1936）は次のように述べている。

漢字が減びなければ、中国は必ず亡びる。この四角い字の弊害を伴った遺産のおかげで、我々の最大多数の人々は、すでに幾千年も文盲として殉難し、中国もこんなザマとなって、ほかの国ではすでに人工雨さえ作っているという時代に、我々はまだ雨乞いのため蛇を拝んだり、神迎えをしたりしている。もし我々がまだ生きていくつもりならば、私は、漢字に我々の犠牲となって貰う外はないと思う。

中国近代化の路線を切りひらこうとした、かつての最高指導者であった毛沢東（1893～1976）も1940年に「新民主主義論」を発表して、「文字はかならず一定の条件のもとに改革されなければならない」と説いた。彼はその後も発言をつづけ、漢字を将来的に廃止する方向にみちびくために、ローマ字に使用を基本とする表音化の運動を推進しようとした。1951年には、「漢字の表音化には多くの準備が必要だが、表音化にさきだって漢字を簡略化して現在の役に立たせるとともに、さまざまな準備を積極的に進めなければならない」と指示した。

漢字の表音化と簡略化については、多くの人々によってさまざまな試案が示され、それらを踏まえて今日の中華人民共和国では、漢字についてはその字体を簡略化した略体の字（簡体字）が、また漢字に代わる表音文字としてはローマ字（拼音）が用いられている。

ここからは中国の漢字が現状にたどり着くまでの道程を見ていこう。

中国語をローマ字で表記したのは、明代（1368～1644）の末ごろに、中国に赴任した外国人宣教師は布教の必要から中国や漢字を勉強したことに始まる。ヨーロッパ人と中国人の協力によって著された書は、ローマ字で中国語の音を書き記すことを試みた異色の韻書であるが、わずか25の文字と高低アクセントを示す5つの符号によって中国語を表記する方法は中国人に大きな衝撃をあたえ、その後の漢字表音化の運動や漢字改革の問題にはかり知れない影響をもたらした。

中国で初めての表音文字は、ローマ字の変形体とも言うべき五十五の独特の字母（表音文字）であった。この文字は「切音新字」と名づけられ、中国の富強のもとには科学の振興にあり、そのためには文字をやさしくして教育を普及しなければならないと考え、案出さ

れたのである。

その後、漢字の字形を一部取り入れた漢字筆画式の「中国切音字母」が発表され、北京の政府に審査を求めたが、使用するには難しいとの回答が寄せられた。清末の漢字表音化は、清政府には受け入れられなかった。

清末から民国の初期にかけて、王照という人物が中国語の（漢字）の表音新文字運動にたいへん貢献した。彼は日本人が漢字と仮名をあわせ用いることによって識字率を高め、教育を普及させていることを目にし、仮名にならって漢字の一部をとった「官話字母」（表音文字）をつくり、読み書きのできない貧しい人びとや女性の教育、通信の便に役立てようとした。1900年、彼は帰国し、その年の冬に仮名式法案の『官話合声字母』を発表した。王照はまた、言語は必ず統一されるべきだと主張し、北京音を標準として字母を定めた。

音韻学者の勞乃宣は王照の字母に賛成し、次のように述べた。

ヨーロッパの文字は二十六の文字を綴り合せただけのものであるから、十人のうち九人までは文字が読める。日本の文化はわが国から出たもので、わが漢字を用いているが、漢字のほかに五十音の仮名があつて発音を示し漢字を助けているため、士君子の高遠な学問は漢字を用いるが、愚賤のものはただ仮名だけを覚えていても用が足せる。ところがわが国では昔から漢字だけでこれを助けものがない。そのため上等な人は文字を読むが、国民教育は普及しがたい。近年わが国でも教育に志す人たちの間に、覚えやすい文字を作る者がたくさん現われたが、中でも王照の拼音官話書報者で作った官話字母が一番よくできていて、五十母十二韻四声を組み合わせると二千余の音ができ、京師の語音は全て包括される。もしこの数十字を覚えて、そのつづり方を知れば漢字の読めない者も白紙で意を通ずることができ、新聞を読み手紙を書くことも十分これでやれる。たとえ老人や子供でも頭のよい者なら数日でわかるし、いくら魯鈍な者でも二三ヶ月たてばわからぬ者はない。（倉石武四郎「王照と勞乃宣」による）

1908年、朝廷から招かれた勞乃宣は西太后に「簡字」の功用を説いた。翌年、そのころ問題となった小学校での漢字教育（一千六百字）に先だつて「簡字」教育を行い、これを義務づけて公民の資格とするよう上奏した。

こういった流れの中で、清末に新文字を考案した者は少なくなかった。中華民国政府の教育部は「読音統一会」を召集し、新中国が使用すべき標準語の基礎づくりをはかった。そして漢字に音注をほどこす目的のために「注音字母」を制定した。

教育部の役人として読音統一会に出席した魯迅は注音字母についてのちに次のように述べている。

当時はこれ（注音字母）でもって漢字に代えることができると考えた人が随分いたが、實際上やはりだめだった。なぜならそれは結局、漢字を簡単にしたものにならず、日本の「仮名」と同様、いくつかの漢字の間にはさむか、あるいは漢字の傍に注記するのならよいが、これを大将にいただくとすれば、とても能力が足りないからだ。書くときたがたするし、見ると眼がちらつく。当時の会員がそれを「注音字母」と呼んだのは、その能力の範囲をよく知っていたのだ（「門外文談」松枝茂夫訳による）。

「注音字母」は清末の漢字改革運動のしめくくりとなったが、その後の政治情勢もあって、五年後の1918年11月になってようやく公布された。その後も改良を重ねながら、1930年にはその名を「注音符号」と改められ、1958年に現在行われている「漢字拼音法案」（中国語ローマ字綴り方案）が制定されるまで教育面で大きな役割を果たしたが、現在ではほとんど用いられなくなっている。

1918年「注音字母」が公布された頃、文学革命が起こり、ひきつづき漢字は白話文（口語文）には向かないとして、急進的な漢字改革論が雑誌や新聞に現われはじめた。最も激しい論議を述べたのは、その頃『新青年』の編集にあたっていた錢玄同（1887～1939）であった。彼は「中国の今後の文字問題」（1918）という論文で、漢字は「20世紀の新時代にはまったく適用できないもの」であるから、「漢字漢語はいっさい使わず、いっそエスペラント（ザメンホフの創案による国際語。その字母は二十八）に改めよう」と主張した。

これに対して、北京大学文科科長で文学革命の先頭に立っていた陳独秀（1880～1942）は「まず漢字を廃し、しばらく漢語は残してこれをローマ字で書くようにしよう」と答えた。このように漢字改革の問題は、1920年代に入るや、混迷の度合いをいっそう深めていったのである。

中国語のラテン化（ローマ字化）運動は、そのころ中国共産党からソビエト連邦に派遣されていた瞿秋白（1899～1935）が、ラテン字母によるソ連の文盲一掃運動に刺激を受け、中国語をローマ字で表記する方法を研究し、ウラジオストックを中心に中国人労働者に普及させたことから始まる。瞿秋白は「国語ローマ字」を批判し、「ラテン化新文字」を提示した。これはわずか28個の字母を用いるだけで音調は表記せず、「国語ローマ字」に欠けていた学習の容易さを重視したものであった。「ラテン化新文字」は1933年頃から上海を中心に中国国内に紹介されたが、1934年の8月には、上海で最初の新文字団体「中文拉丁（ラテン）化研究会」が結成され、「ラテン化新文字」を推進する運動が始まった。魯迅もこれを指示する者のうちの一人であった。魯迅はこう言っている。

今はもう「書き方をラテン化する」一筋の道があるきりだ。これは大衆語文と分かつことのできぬものだ。それもやはり読書人から真っ先に試験し、まず

字母、綴法を紹介し、それから文章を書くことだ。手始めには、日本文のように、名詞の類の漢字だけ少し残して、助詞、感嘆詞、後には形容詞、動詞まで全部ラテン綴りで書くようにする。そうすれば、見た眼にいいばかりでなく、瞭解もはるかに容易になるだろう。横書きに改めるのは、当然なことである（「漢字とラテン化」松枝茂夫訳による）。

1949年10月1日、中華人民共和国の成立が毛沢東によって宣言された。共和国が成立した10月10日には、はやくも北京に中国文字改革協会が生まれ、会長と言語学者や文学者を含む七十八名の理事が選出された。1952年には毛沢東は「文字は必ず改革し、世界共通の文字である表音化の方向へ向かわなければならない」と指示した。

1952年、教育部に中国文字改革委員会が発足したが、委員会が翌年に「拼音法案」委員会を設け、おもにローマ字方式による原案の研究と作成にあたった。次の年に開かれた文字改革研究委員会は、いくつかの案を検討した結果、委員会が推すローマ字方式の原案を採用することに決め、これに修正を加えた「漢字拼音法案草案」が1956年2月に発表された。この草案はさらに若干の修正が加えられ、1958年には「漢語拼音方案」として公布された。これが現在、漢字の音を表記する補助的な文字（ローマ字）として、学校教育や全国共通語（普通語）の普及など、多くの分野で用いられているものである。

魯迅の発言、毛沢東の指示の前提にあったもの、それは一般の人々の識字率の低さであった。そこで障害となっている漢字をなくしたほうがよいと考えたのであったが、大衆一般は漢字のラテン化よりも、むしろ漢字そのものの知識を身につけることを強く望んだことから、簡略化した漢字による識字教育にきりかえられ、さまざまな経緯をへて「簡体字」が用いられるようになり、今日に至っている。最初は重視された「拼音」（ローマ字）は「普通話」（全国共通語）の発音を示す符号として用いられることにとどまり、今のところ漢字にとって代わる様子はまったくうかがえない。

それどころか、近年では、文字は簡略であれば学びやすいという主張に疑問を示す動きもある。それは、漢字のローマ字化や「簡体字」の普及を主張する漢字改革のなりゆきに反対し、漢字そのものがもつ優秀さを見直そうというものである。

ラテン文字を導入しなかった国として、身近な国である中国と日本を取り上げてみた。この二つの国はトルコと同じように、ラテン文字のシンプルさを知って、自分たちが長い間使用してきた文字は本当に自分たちの言語にふさわしいかという疑問が浮かび上がるようになった。日本では明治の初めから、そして中国では清末から起こった漢字改革運動は、トルコの文字改革の動きより少し遅れて本格化した。百年以上を経たいま、結果的に日本も中国も漢字を保持しつつ、ローマ字を表音文字として漢字を学ぶ段階で補助的に使用している。なぜならば漢字はあまりにも存在が大きい。とくに中国では、漢字はただ話し言葉に準ずる記号ではなく、独自に存在する事物の象徴でもあったと考えられる。よって漢字

は様々なものの印とされ、こういった文字の使い方は文字が発音の要素に分解されたものとなっているほかの文明には見当たらない。漢字は独特な形態を持っているだけでなく美的な価値がある。この遺産は日本にも重くのしかかっている。だから言葉の表記は音と形が混然としたままとなっても、日本は日本語独自のアルファベットに統一することはできなかった。中国も漢字を簡略化することにとどまった。このような事実がある中で、中国の漢字をラテン化しようと試みた人々の存在は貴重だといえる。とくに数々の場面で発言した魯迅もその一人だ。彼の述べた言葉はトルコの場合と重なるものがあつた。本章において彼らの活動を長く述べたのもラテン文字支持派を強調したかったからだ。

おわりに

文字改革はトルコの歴史における大きな出来事であつた。この出来事を教育史か政治史のどちらか一方に分類するのならば、わたしはこれを政治史の中の1ページに入れるだろう。なぜならば第二章で述べた文字改革の論争の内容は、言語学にはほとんど触れず、主に宗教・歴史・経済・外交といった類であつた。また文字の改革を望んだ者の中で、学者や作家よりも政治家や軍人のほうが多かつた。改革は、近代化や脱イスラム化に大いに影響したが、本来の目的である識字率の向上はどうだろうか。トルコ国民の識字率は、1927年で10.6%（男17.4%、女4.7%）、1940年で22.4%（男33.9%、女11.2%）、文字改革以降確実に向上しているが、実際これと同時に国内の学校数も増加していたのである。5062校（1923年）から11040校（1940年）。つまり、教育が普及した成果が、識字率の向上を実現させたともいえるのだ。³⁷

文字はその国を代表するものの一つである。それは歴史、文化、宗教、政治、あらゆるものに関係する。文字の改革を実現させたアタチュルクは確かに偉業を成し遂げたといえる。しかし、本稿では文字の改革をいつもアタチュルクの改革と結び付けていた歴史的見方から離れて、中立的に文字の改革を見てきた。第一章では文字自体、第二章では当時の学者たちの意見、第三章では文字の改革、第四章ではトルコと同じように文字の変更を試みた国。結果的に、文字の改革は学問の分野というよりも政治の分野に入るという結論にたどり着いた。これは文字を変更した全ての国に共通する。外国の影響と国の政策が言語や文字を支配できるとも言える。最終章で中国を大きく取り上げたのも、1900年代の

³⁷ 新井政美『トルコ近現代史』、みすず書房、2001、p.215

中国はトルコとよく似た状況におかれていた。西洋の文化に触れ、ラテン文字のシンプルさに憧れを抱くようになった。文字とは表意ではなく表音のためにあるべき。国の識字率が低いのは文字が原因ではないかと論争が起こり、19世紀後半以来、何人もの知識人が構想しながら、発案を繰り返した。反対の声と政府の圧力の下で一般化させることができずに何十年間が過ぎ、文字の改良と文字の変換と大別できるこの二つの問題に一挙に決着をつけたのは、強い統制力を持ち、国民の心を支配できたアタチュルクであった。中国でいえば、毛沢東だ。もしかすると、日本にはそのような政治家が現われなかったから、今私たちは仮名、漢字、ローマ字と多種の文字の中で生活しているのかもしれない。

トルコ語の文字がラテン文字となってもうすぐ80年が経つ。トルコは文字改革を支持した人々が望んでいたように着々と近代化し、西欧への仲間入りの道を進んでいる。またトルコ語は世界の言語で学びやすい言語の一つであるといえる。私もトルコ語を勉強する一人としてこれを実感している。ただアラビア文字を否定するつもりはない。アラビア文字も、漢字が中国にとってかけがえのない財産であると同じように、トルコの輝かしい歴史にとってなくてはならないものである。トルコはよく東西の架け橋だといわれる。東のアラビア文字から西のラテン文字へ変換したこともトルコの運命ではないだろうか。

参考文献

新井政美『トルコ近現代史』 みすず書房、2001年。

大島正二『漢字と中国人』 岩波新書、2003年。

ジョルジュ・ジャン『文字の歴史』（高橋啓訳） 創元社、1990年。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（編）『アジア文字入門』 河出書房新社、2005年。

日本イスラム協会、嶋田襄平、板垣雄三、佐藤次高（監修）『新イスラム辞典』 平凡社、2002年。

林徹「トルコ語」 東京外国語大学語学研究所（編）『世界の言語ガイドブック2』 三省堂、1998年。

林徹「トルコ語の文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄『言語学大辞典』 三省堂、2001年。

町田和彦（監修・著）『ラテン文字と世界の言葉』 小峰書店、2005年

BİLAL N ŞİMŞİR, *Türk Yazı Devrimi*, Turk Tarih Kurumu, 1992.

Etem ÜNGÖR, *TÜRK MARŞLARI*, ANKARA, 1966.

Geoffrey Lewis , *The Turkish Language Reform A Catastrophic Success*,
OXFORD University Press, 1999.

Hüseyin Yorulmaz. *TAZİMATTAN CUMHURİYETE ALFABE TARTIŞMALARI*,
KİTABEVİ, İSTANBUL, 1995.

SAMİ N.ÖZERDİM. “YAZI DEVRİMİNİ KAVRAYAMAYANLAR”, *TÜRK DİRİ* ,
Yıl28, Cilt XXXV I I I , Sayı 326, 1 Kasım 1978.

アジア・アフリカ言語文化研究所ホームページ <http://www.aa.tufs.ac.jp/>

付表1.

オスマン朝演劇

演目：蜜ろう屋（パンフレット・表）

